
幻想入りしたい俺が通りますよ

8966

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想入りしたい俺が通りますよ

【Nコード】

N1005R

【作者名】

8966

【あらすじ】

なんか幻想郷にやってきた主人公

紫の提案により、7つのコインを集めることに

彼の『ありとあらゆるものを誘引する程度の能力』……

それは運をも引き寄せる！

なんかトラップとかやってたりしてるけどそれが決闘なんだよ。たぶん後々、弾幕ごっこも混ぜ込めたらいいな

いまいち方向性が決まっていなくてもそれでも「愛嬌」ということで。

第壱話 『やってきたのか？幻想郷』

そーらをじゆうにとーびたーいなー

はい、現在進行形で落下中です。ちびるよ、これは。

別にスカイダイビングしてるわけじゃないんだぜ？ パラシュー
トなしてどんだけシュールだよ。ハハ。

そんな呑気なこと考えているうちに地面が見えてきた。やっべ、
レポートやってねえや。

人が落下する時、はたから見たら結構な速度らしいが今の俺には
何もかもがスローに感じられた。

なんというか、清々しい気分だ。まるで俺の中の悪が全て洗われ
ていくような……。

無事に帰ったら、俺、告白するんだ……。

おっと、そんなこんなで地面がすぐそこだな。もうそろそろ時間
のようだ。

別れとはあつけないものだな、こんなにも早く過ぎ去ってしまう。
死ぬ前に新作動画、uploadしてくべきだったな。

嗚呼、一度でいいから行ってみたいね、

『幻想郷』

「……もうここは幻想郷よ？」

不意にそんな声がした気がした。その直後、こっ、なんというか
激しい痛みみたいなのが俺を襲ったつばい。自分でもわかんなくなっ
た、痛すぎて。

「……ハッ！」

目が覚めた。今、自分の寝てるものはアレだ、ばあちゃん家の布団を彷彿とさせる感覚だった。

「……なんだ、やっさいもっさいか……」

頭のねじが何本か抜けてるみたいで自分でも何言ったのか。

まず、今の自分の状況を確認。

「体が動かねえ……」

言葉の通り、体が動かない。いやまて、首から下が無いってオチか？ そっというのはやめてくれよ、マジで。

ほんととは怖い夢見てただけでここは実家だとかそういう夢オチか？ それでもいいが正直つまらんぞ。

そんなオチを練っている俺の考えをぶっ壊すかのように、近くで襖の開くような、木の擦れる音がした。

足音がいくつか俺に近づいてくる。母さんか？ 姉貴か？ 父さんか？

「……れは……タにな……」

「……うぶか……かりが……」

なんかブツブツ聞こえる。少なくとも俺の知ってる声じゃないぞ、これは。

俺はさっきからあきっぱだった瞳でなんとか声のする方を見ようとする。

でも、その方向に眼球を向けることすらできない。てかドライアイになるぞ、これ。

「さっさと……ってしまい……う」

声の主と思われる影が、俺の目の前に仁王立ちしているようだ。

生憎、視線はそっちの方へは向けられないので、頭のとっぺんの頭ときん

巾みたいなのしか見えなかった。何故仁王立ちかって？ 妄想だよ
妄想。 頭巾野郎は近づいてきて、こちらに向かつて光る何かを向
けた。

え？ 何？ 俺死ぬん？ さっきの展開からだともう死んでる才
チか。

バシヤツ！

「うおっ！？ まぶしっ！」

「あれ？ 生きてました？」

不意に体が軽くなつた気がした。目も動くし、その他すべての感
覚もクリアになる。

「俺？ 生きてる？」

「ずっと目開けてたのでもう死んだんじゃないかと」

あれ？ なんか話が噛みあつてない気がする。

まあ、それはいいとして俺の正面の人物、烏帽子野郎の顔へと目
を向ける。

「なっ、なんだってこんな……」

意外！！ それは射命丸文！
しゃめいまるあや

「……どうしました？」

なんだってこんなところに俺の嫁がいらっしやる。夢でも見てん
のか俺は。死ぬ間際の夢が射命丸って俺スゲエ。

「つかぬことをお聞きしますが、ここはどこです？」

天国だとかそういう回答を俺は待っていた。が

「ここは博麗神社……っていつてもわからないかしら？」

もう一人の声の主と思われる影がこちらに近寄ってきてそういつ
た。

博麗神社……？ ……！ その時俺に電流走る……！
はくれいれいむ

「てことはあなたはあの『博麗霊夢』さん……？」

「あら、知ってるの？ てつきり外の間かと思ってたわ」

外？ ああ、ついに俺も幻想入りを果たしたのか。なるほど。

「で、そちらは射命丸文さん？」

「私の事もご存じなんですか。せっかく空から人が降ってきたのを救出したっていうのに……ハア……」

あやや？ 射命丸がネタがうんとか言いながら溜め息をついている。
ああ、可愛いなあ。

「外の人間じゃないなら、ホラ。出しなさい」

指で円を作ってこっちへ手を向ける。ああ、金か。

「でも俺、こっちの人間じゃないツスよ」

「はあ？ 何言ってるんの今更」

うわ、顔こええ。とりあえず俺は寝たままでポケットを漁る。

出てきたのは二十円とマクドのクーポン（ビッグマック）。何しようとしてたんだろうな、俺。

「とりあえず今週から使える奴っぽいのでこれでなんとか……」

この世界にマクドはあるんだろうか。霊夢にクーポンを差し出したその時、

「なによそれ、今どきはかざす方でしょ」

「そっちツスか……」

随分とナウいな、この霊夢。

「とりあえず、あなたが外の人間だということは信じてあげるわ」

「ありがたきしあわせ」

布団で寝ながらというのも失礼なので体をゆっくりと起こす。

そのとき背中あたりから、バキッ、とキットカットを食った時のような音がした。

「あびゃあああああああ？」

「そんなに無理しない方がいいですよ？ いくら勢いを減らしたといっても結局は体を地面に激突してるんですから」

そうか、射命丸の能力で助けてくれたのか。ありがたい……。

無問題よと霊夢が一步前へでる。その手にはラッパのマークのあれみたいなのが握られていた。ヤゴコ口書いてあるが大丈夫か？

「えーりんからもらったこの薬があればたちまち元気になるわ！」
そいつは議論の余地がある。そう言いたかったが声が出ない。出てるといえば出てるが呻き声。

「さあ、飲んで！」

なんでそんなに生き活きしてるんだ。やめてくれ。死にたくない。口をこじ開けられ、丸薬を投げ込まれ、水を浴びるように飲まされる。

鼻に水が入っていてえ。でも、そんな思いも一瞬にして消えた。意識がぶっ飛んだ。まるでN64の電源ボタンを押したときのように。

第貳話 『嫁とBBAと巫女と魔女』（前書き）

題名に反して射命丸の出番はありませんが悪しからず

第貳話 『嫁とBBAと巫女と魔女』

暗闇の中を一人で走る。何かを追っているわけでもない、何かに追われてるわけでもない。

何の目的もなく、人生を走り抜けてきた。

こんな人生になにか刺激が欲しかったのかもしれない。

まるで冷たい水を顔にぶちまけられた時のように……、冷たい水を……

ん？ 冷たい……水……？

「……ハッ！」

「あ、起きた」

俺はあの薬を飲まされて気を失っていたらしい。薬のせいで気を失ったのか、俺自身がビビって気を失ったのかは定かではないが。

「あれ、ここは……？」

「寝ぼけたこと言っつてんじゃないわよ」

博麗神社っぽいですね、はい。

「俺は気を失ってそれから……」

自分の顔に触れるとびっちゃびちゃだった。霊夢が俺を起こすためにわざわざ冷水をぶちまけてくれたみたいだ。

「で、体はどう？」

俺はゆっくりと体を起こす。さっきの痛みへの恐怖心がまだ残っているが、なるべく気にしないふり。

「……動く……。こいつはすげえや」

勇気百倍、元気百倍といったところか。俺は布団から飛び起き襖を蹴破って外へと出た。

「ヒヤッホオイ！最高にハイってやつだアアアア！」

「ここで暴れるなあああ！」

神社の前を駆け回っていると霊夢に叱られた。やれやれだよ、まっ

たく。

「とりあえず襖直せ」

「サーセン」

俺は丁寧に襖を直す。このレールみたいなところに襖入れるの苦手なんだよ、俺。

「見ての通り元気になったみたいね」

「ああ、お世話様で」

周りを見渡すが霊夢以外はひとつこひとり見当たらない。

「射命丸は？」

「香霖堂に用があるからなんとか〜って」

嫁は不在か。仕方ないね。

「そういえば外の人間がなんとかって言うてたけど、やっぱりここは幻想郷なのか？」

「そうね。最近では外来人もそう珍しくないからね」

あれか。神隠しとかいうやつ。もしかしたらそれが原因で……。

「神隠しだとしたらまた紫かしらね」

「ですよー」

だとしたらさっさとバビ、もといゆかりんを探しに行かないと。でも見つけたところで帰してもらえるのか？ そんな不安が俺の心を過った。

「ゆかりんて今どこにいるんだ？」

「紫も知ってるの？もしかしてほんととはこっちの人間なんじゃ……」

霊夢がこつちを疑い深いまなざしで見てるので全力で否定した。

「まあ、こっちの世界でも色々あってな……」

「ふっん……。ところであなた、名前は？」

名前……。？　なんだっけ……。？

とりあえず思い浮かんだ名前を言ってみる。

「木反イタ……かな」

「木反……。ね？　本名？」

恐らく本名ではないのだがこれが一番しっくりくる。

「本名かどうかはわからないがそういうことにしといてくれ」

「自分の名前もちゃんと言えないの？ 他に自分に関して覚えてることは？」

家族は母さん、父さん、姉貴の四大家族で、みんなの名前は……、アレ？

俺の住んでいたところは……どこだっけ？

「……全然覚えてない……」

「ふう……仕方ないわね」

霊夢は溜め息をつくと虚空に向かって声をかけた。

「紫ー！いたら来てちょうだい！」

「ハァーイ」

ババァーン！！

空間の裂け目、スキマからみんなのアイドルこと、八雲紫がひよこやくもゆかりと顔を出す。

「ちよつと、彼の事どうする気？」

「ちよつと面白そうだったから連れてきただけよ」

俺の何が面白いんだか全く理解できない。

「あなた賭け事は好きかしら？」

「例えば？」

賭け事と言ったら趣味の麻雀くらいしか……。みんなは血液とか賭けちゃだめだよ！

「……チンチロリンとかポーカーとかコイン投げとか」

「チンチロリンはどこぞの漫画で読んだことしか……」

そういうことは覚えてんだな、俺。相手は露伴だったっけ。

「ポーカーはダメですね、ブラックジャックくらいなら」

「じゃあ一勝負どうかしら？」

そう言つてスキマからにゅつと体を出すと、

「ちようどいい相手が来たわね」

「ゑ？」

ゆかりんの視線の先へ目を向けると、そこには空飛ぶ黒い何かがあった。

「……完全に魔理沙だアレ」

それはどうみても箒にまたがり空を飛ぶ魔女、霧雨魔理沙きりさめまりさだった。

「おーっす霊夢、紫ー」

またしても主要キャラが俺の前に！ どうみても俺の願望だコレ。

「なんか面白い奴がいるからっていつから来てやったぜ」

「やっぱり俺はネタなのか？」

とりあえず自分の名前と今の状況を魔理沙に説明する。

「二割方理解したぜ！」

「全然理解してねえ！」

「それはいいとして、私は霧雨魔理沙だ。よろしくな」

存じております。でもまたそういうこと言つと話こんがらがるからな。

「で、そろそろいいかしら？ 木反」

「ゆかりんは俺の本名知らないのか？」

「質問を質問で返すんじゃないか！」

「す、しゅいましてん！」

おお怖い。

「まあ構わんが、相手は魔理沙か？」

「そうね、コレ使つて頂戴」

スキマからポパイと卓袱台とトランプを投げつけてくる。このトランプ任天堂じゃねえか懐かしい。

「ちよつと、ここでやるの？」

「モチのロンよ」

「ゆかりん、それはちよつとふ」

「それじゃあさっさと始めて頂戴」

そんな強く引つ張らないで。しかも引つ張るなら服にしてくれ。もみあげは痛い。

ゆかりんに無理やり卓袱台の前に座らされる。

「それじゃあいくぜ！」

「何のノリかわからんがかかってこい！」

こうしてブラックジャックによる魔理沙との対決が始まった。

第参話 『賭博黙示録イタ』

「前回までのあらすじ」

主人公『木反』は気づいたら幻想郷にいて、射命丸、霊夢、魔理沙、紫と有名な面子に次々と遭遇。

紫の提案によって何故か魔理沙とブラックジャックをすることに。空気と化した霊夢に出番はあるのか？

そして紫がブラックジャックをさせる意味とは？

謎と謎が絡み合い、すべての者の運命を狂わせてゆく……！

「こんなんで大丈夫かしら」

「大丈夫でしょ」

「今回は特別ルールとして、ディーラー無しのプレイヤー対プレイヤーのサシね」

その他のルールは基本通りねと付け足す。

「カードを配るのは霊夢、やってくれるかしら？」

「しかたないわね……」

俺はケースから取り出したトランプを霊夢に手渡す。

すると見事な手さばきでトランプをきりはじめる。

「どっちに先配る？」

「コインを投げて表なら木反、裏なら魔理沙でやって頂戴」

「十円玉ならあるぞ」

俺はポケットから十円玉を取出し、おもむろにコイントスをする。自分の中ではジンクスとして先に引いているときの方が勝ち運が向いてくる。後引きだと安定しないんだよな。

俺は手の甲で十円玉受け、反対の手で隠す。

「どっちだ……？」

手を外すと十円玉は、平等院鳳凰堂の刻まれている表だった。

（よしっ！ 幸先いいな……。これならっ！）

「木反が先ね」

そう言つて霊夢から配られたカードを受け取る。

「……」

「……」

俺の手札はQと4。合計で14だ。魔理沙の顔色から窺うに、あつちの手札も微妙なのだろう。

「ヒットだ」

俺はそう宣言する。霊夢からカードを受け取り、手札に加える。引いたカードは6。合計20で、これならBブラックジャックJ以外負けはない。

「私はこのままでいいぜ」

「なにっ？」

スタンド……だと？ まさかこいつそこまで高い手だったのか？

「……俺もストップだ」

「それじゃあ場に出してちょうだい」

霊夢に促され、俺と魔理沙は手札を場に出す。

魔理沙の手札はKと9。合計19。ギリギリ俺の勝ちだ。

「あちゃー、私の負けだな」

「これだったら難しいとこだな。霊夢、ちなみに次のカードは？」

霊夢がめくつた次のカードはK。俺も魔理沙もバーストする数字であつた。

「引いてたらバーストしてたのか……」

危なかった。魔理沙の自信に圧され、もう一枚引いていたら負けていた。

「よし、もう一勝負だ！」

「俺は構わないぞ。さっきと同じコイントスでいいな」

本当は一度で終わらせるつもりだったので、デッキにカードを戻していた。

「次は私に投げさせてくれ」

俺は十円玉を渡すと魔理沙は十円玉を指で弾き飛ばす。

やはり先に引いていると安定した手札になりやすいな。

次は裏が出てくれれば、いつもと違う手になるかもしれないからな。

「よつと……。で、今度は……」

出たのは裏。よつて魔理沙が先に引くことになる。

「はい、魔理沙からね」

魔理沙、俺の順で霊夢からカードを受け取る。

魔理沙は二枚目のカードを受け取った瞬間にこちらをちらっと見た。

（まさかB Jか？）

魔理沙の様子を窺いながら二枚目のカードを霊夢から受け取る。

俺の手札は、エースとJ。B Jだ。

（よし、これで負けは絶対でない！）

「私は引かないぜ」

「俺もだ」

両者スタンド。霊夢の掛け声で手札を場に出す。

「ちくしょう……」

「惜しかったぜ……」

魔理沙の手札はエースと10のB J。俺もB Jなので引き分けとなる。

「次でラストにするか」

「望むところだぜ！」

手札を横に寄せると、今度は俺がコイントスをする。

（今日は後攻の方が乗ってるな。もう一度裏が出れば……）

いつも通りの動きで十円玉をキャッチし、確かめる。

出た目は裏。再び魔理沙が先に引くこととなった。

「また先攻とはラッキーだぜ」

俺と魔理沙は霊夢からカードを二枚受け取り、確かめる。

俺の手札はエースと7。合計8か18となる。

魔理沙は一瞬険しい顔をした後、いつもの表情に戻る。

「私は一枚引くぜ」

魔理沙は霊夢からカードを受け取る。その瞬間、魔理沙の口元が緩むのが見えた。BJか？

「俺も一枚……」

霊夢からカードを受け取る。引いたカードは、6。

一瞬ヒヤッとしたが、エースなら1として扱うことができるので、現在の合計は14。

7を引けば俺はBJ。しかし、魔理沙が7を三枚持っている可能性もある。それでもまだ7はある。7以下なら俺はなんでもかまわん。

「私はストップだぜ」

「俺はもう一枚だ」

霊夢から再びカードを受け取る。引いたカードは、6。合計20となった。

（この野郎！ギリギリで止まりやがった！）

さっきの試合で使ったエースと自分の手札のエースを合わせて三枚。魔理沙が持っていないければ、先程までの7と同じく、引く可能性はあったのだ。

しかし、あまりにも危険すぎる。エースを引く確率よりバーストする確率の方が圧倒的に高い。

俺は悩んだ末に、決死の覚悟でこう言った。

「俺はもういい。勝負だ」

「それじゃあ場に出して」

俺と魔理沙は同時に手札を場に出す。

魔理沙の手札は……

『ブラックジャック』

4、7、KのBJ。対して俺の手札は20、敗北。

「今度こそ私の勝ちだぜ！」

「ああ。俺の負けだ」

結局、一勝一敗一分の試合結果となった。実力は完全な五分五分で、どちらにも運が向いていたと言える。

「いい勝負だったぜ」

魔理沙は立ち上がり、俺に手を差し伸べてきた。

「ああ！次はちゃんと決着をつけてやるぜ！」

俺も立ち上がり、魔理沙の手をしっかりと握る。

「望むところだぜ。よろしくな木反」

「ああ、こちらこそ」

今ここに、ブラックジャックという名のゲームを通して新たな友情が生まれた。気がした。

「ちよつといいかしら？」

ゆかりんがこちらへと近づいてきて

「今を通してどう思った？」

そう尋ねてきた。

「俺は不思議な友情を感じたぜ」

「私もだぜ」

ゆかりんはそうじゃなくてと溜め息をついた。

「木反。もう一回コイン投げてごらんなさい」

「え？ わかった……」

コインを投げるとゆかりんがこう言ってきた。

「表を出さないと死刑だからね」

「ええ？二分の一で俺殺されんの？」

コインをキャッチするのが急に怖くなった。

（頼むから表出てくれ！ 本当に殺されかねん！）

そう願いながら十円玉をキャッチする。

十円玉の面は、表。

「あつぶねえ！」

「やっぱりね」

「やっぱりってどういうことだ？」

「きつとあなたはあと十回くらいやっても狙った方を出せるでしょうね」

「つまり……どういうことだってばよ……」

今度は、ゆかりんが俺から十円玉をひったくる。乱暴だなあ。

ゆかりんは某投手のような構えをとると

「せーの……、どっせい！」

思いつきり十円玉を投げた。しかも森の生い茂ってる方向に向かって。

「何すんだよ！俺二十円しか持ってなかったんだぞ！」

「いいから。コインが帰ってくるように念じてみなさい」

「まったく今の状況が理解できん……」

とりあえず俺は怒りを抑えながら十円玉の飛んでいった方向を凝視する。

（俺のなけなしの金……。今すぐ帰ってこい！）

そう願った瞬間、木々の陰から何かが俺の顔に向かって飛んでくる。

危険を感じスツと顔をずらした瞬間、先程まで眼球があつた位置、俺の蟀谷を掠って通過し、後ろ灯籠に大きな音を立てて激突した。

俺の蟀谷からはスーッと血が流れていて、焼けるように痛い。

「な、なんじゃこりゃあ！」

俺は流れる血に触れ、そう叫ぶ。

「これは……、何かを引き寄せる力って感じかしら？」

何かを引き寄せる力。霊夢はそう言った。俺にそんな能力があるのか？

「さしずめ『ありとあらゆるものを誘引する程度の能力』といったところかしらね」

『ありとあらゆるものを誘引する程度の能力』……か。どこかの妹様は『破壊』だったが、俺の場合は『誘引』か。
なかなか面白そうじゃないか。

第肆話 『僥倖を掴め』

「きつとその能力で、運を誘引、引き寄せてたのね」

「運なんて引き寄せられるのか？」

ゆかりんはフツツと笑うところ言った。

「言ったでしょう？ 『ありとあらゆるものを誘引する』……。その対象に制限はないのよ」

俺の能力は運すらも引き寄せるつてのか。そいつあすげえや。

「その能力の片鱗に気が付いていた、知識にあふれた私は考えたのよ」

「おばあちゃんの知恵ぶk」

「あゝあゝ！？」

「ごめんなさい」

気づいたときには、俺はその場で土下座をかましていた。

「少なくとも今のあなたは誘引能力を無意識で使っているわね」
確かに自覚して使ったのはさっきが初めてだ。

それで無意識のうちに俺は運を引き寄せていたわけか。

「あなたはまずその能力を自分のモノにすることね。あなたがこの能力を完全にコントロールするまで一つ、役目を負ってもらっわ」
「なんだ？」

ゆかりんは取り出した扇子を開き、口元を隠してこう言った。

「あなたには厄介者達を誘い出すエサになってもらっわ」

「なんでそうなった！？」

エサになれってどういうことだよ！ わけわかんないよ！

「きつとあなたの能力なら否が応でも厄介ごとを引っ張ってきてくれそうだし」

「まるでゴキブリホイホイだぜ」

「そんな言い方しないで！」

ゴキブリホイホイって……あんな……。

「で紫。ただの人間に厄介者引っ付けて、一体何させる気よ？」

「さつきみたいに『賭け』をしてもらうのよ。木反本人がね」

「もし負けるようなことがあれば？」

「負けちゃだめよ」

すっげえ無理難題。遠まわしにくたばれって言われてんのかこれ。

「でも？みたいな奴が相手だったらどうするのよ」

おお、霊夢はさつきからいい意見を出すな。イケイケゴーゴー。

「そんな時はごり押しね。弾幕ごっこでもしてね」

「どうやってごり押しと！？ 俺弾幕とか出せねえから！」

「無理よ！ こんなただの人間に戦闘だなんて！ そんなことさせるならここで一生働かせる方がいいに決まってるわ！」

そついうことでしたか、霊夢さん。

「大丈夫よ。この件が片付いたら後はあなたに任せるわ」

「なら仕方ないわね」

「売られたよ！ 本人の目の前で売買が行われた！」

俺に権利とかねえんだなここは。

「とりあえずあなたにやつてもらいたいことを説明しておくわね」

ゆかりんはスキマに腰を掛けるとゆっくりと話し始めた。

「まず8つのコインがある石版に埋め込まれていて、それを誰かが持ち出してあちこちにばらまいたのよ。そのうちの一枚がこれ」

そう言っつてゆかりんはコインを一つ取り出す。

「これは鷹のコインね。偶然にもこれは私が拾ったものよ」

「あとは虎とバツタか？」

タカ！ トラ！ バツタ！ タトb（ry

「文書によると鷹、孔雀、蛇、狼、熊、狐、蠅、蠍の八種類があるらしいわ」

綺麗にスルーされたな、おい。コンドルがないのか、惜しいな。

「それを全部集めてきてほしいのよ」

「俺が！？ なんてそんな面倒なことを……」

「私も面倒なのよ。やってくれたら元の世界に帰すと約束してもい

いわよ？」

元の世界に帰れるという条件で俺にそれをやれと。いつもなら断っていたのだろうが今の俺は違った。

「よしわかった。やってやろうじゃないか！」

「えっ！？ 本当にやるの！？」

「いくらなんでも紫の言うことを真に受けちゃだめだぜ！」

霊夢と魔理沙が俺に異論をマシンガンのごとく浴びせてくるが

「あなたたち、諦めなさい？ 本人がやるって言ってるんだからやらせてあげないと可哀想よ？」

「俺がやるって決めたんだ。口出し無用」

この時の俺は地面にぶつかったシヨックとか薬飲んだ影響でハイだったのだろう。

霊夢と魔理沙も納得いかなそうな顔をして頷いていた。

「やってくれるって言っならこれを渡しておくわ」

ゆかりんはスキマでゴソゴソすると何かを俺に投げ渡してきた。

「これは……指ぬきグローブ？」

「天下無双てんかむしやう僥倖えいせい籠手かごてと呼ばれるラッキーアイテムよ。これで金持ちになった人々は数知れないわ」

超胡散臭い話だな、それ。しかもこの指ぬきグローブ、恐らく合改革だぞ。

「それである程度の弾幕を扱うことも可能よ。この幻想郷の中でだけけどね」

それはあなたにあげるわと、黒い指ぬきグローブ、天下無双なんとかをゆかりんに託された。

「理論上スペカも創り出すことができるらしいけどそれはどうやらスペカがないのはちよっときついかもな。まあ弾幕が扱えるだけ普通の人間よりマシだと思うが。」

「コインは手に入れるたび私に寄越して頂戴」

「なんでだ？」

「コインは所持してるものの心を支配するのよ。例えば、この鷹の

コイン。持つ者を『意地悪』に支配させるわ。コインの力のせいで誰もコインを集めようとしない、だから厄介者なのよ」

なるほど。だからゆかりんはいつも通りなのか。

「あと、このコインは何かしらの『勝負』をして勝たないと譲渡は許されないのよ。だから賭けとかがちょうどいいと思ってね」

「だから俺が適任だと？」

「適任かどうかは知らないけど、ちょうどあなたを見つけちゃったから」

そこは嘘でも適任とか言ってくれよ。モチベーションが下がる。

「で、そのコインは誰が持ってるんだ？」

誰が持っているかわからなければどうしようもないからな。

「ひとつわかつているのは永遠亭にいる誰かって事ね」

「それだけか？」

「それだけよ」

………………。永遠亭の行き方すら知らない俺にどうしろと。

「人里にでも行って案内してくれる人でも探したらどうかしら？」

「そんなに簡単に引き受けてくれると思うか？」

「ええ。賭けをして勝てばね」

そこで賭けの案が出るか。第一、俺と賭けをしてくれる奴がいるすらわからんぞ。

「まあ、なせば成るわ」

投げやがった。視線そらすな、おい。

「これ置いてくからあとは頑張つといて。バアーイ」

呼んでくれればいつでも行くわと言い残して、スキマの中へと消えていった。

スキマが消えたあとには、サイコロとお椀、さっきのトランプと巾着袋が置かれていた。

「これで戦えと…………」

なんか急に不安になってきた…………。

「とりあえず人里までの行き方はわかる？」

「まったく知らん」

かなり不安になってきた……。やべえ、帰りてええ！ 帰るとこないけど。

「私が連れて行ってやろうか？」

魔理沙がそんな提案を持ちかけてくれた。正直とてもありがたい。

「できるなら頼むよ、魔理沙」

「わかったぜ。これで貸し一つだぜ？」

貸しの一つくらい仕方ないね。

「じゃああとは頼んだわよ、魔理沙」

「任しとけ」

魔理沙は箒にまたがると俺に手招きをした。

俺はさっきゆかりんに渡されたサイコロやらなんやらを巾着袋にしまい、天下無双なんとかを両手に装着する。これでほんとにラッキーになるんだろうか……。

そんな不安を抱きながら魔理沙の乗る箒へとまたがる。

「それじゃあ霊夢。色々世話になったな」

「終わったらちゃんとここで働くのよ」

「はいはい。それじゃ」

魔理沙の肩につかまると同時に、箒が宙に浮く。この感覚は男にしかわからない感覚だろうな。

そんなこんなで俺はよくわからんコインを探すこととなった俺。

これからどんなことが待ち受けているか全く予想ができないが、自分ができる限りのことはやってみようと思う。

さつきから薬の副作用が切れてきたのか、だんだんと不安になってきた。

…………… 本当に大丈夫なのか？ 俺。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1005r/>

幻想入りしたい俺が通りますよ

2011年2月23日23時25分発行